

氏名（本籍） 曾 根 康 博（岐阜県）  
 学 位 の 種 類 博 士（医学）  
 学位授与番号 乙 第 975 号  
 学位授与日付 平成 7 年 3 月 24 日  
 学位授与の要件 学位規則第4条第2項該当  
 学位論文題目 表面型大腸病変の注腸X線所見  
 審 査 委 員 （主査）教授 土 井 偉 誉  
 （副査）教授 佐 治 重 豊 教授 高 見 剛

### 論 文 内 容 の 要 旨

近年、大腸癌の発育進展に対する概念が変貌し、平坦・陥凹型を呈する腫瘍が表面型大腸腫瘍として注目されている。表面型大腸腫瘍は注腸X線検査にては平坦隆起として描出される。

申請者はルーチン注腸X線検査にて描出された平坦隆起病変につき検討し、そのX線所見と臨床上の重要性を明らかにした。

#### 研究方法

愛知県がんセンターにて1992年6月から1994年7月までに注腸X線検査にて描出された平坦隆起病変42例45病変を表面型大腸病変と呼称して検討した。その定義は高さ3mm以内、大きさ4cm以内で肉眼的に平坦な印象を与える病変で、すべて内視鏡検査により確認され、組織学的診断が得られている。その臨床像とX線所見につき検討した。

#### 研究結果

1) 頻度は4665例中42例で注腸X線検査の0.9%であった。うちX線で発見されたものは31病変であった。組織型は過形成性ポリープ：5，腺腫：24，m癌：4，sm癌：12であった。大腸癌取扱い規約の肉眼的分類ではⅡa様，Ⅱa＋Ⅱc様が多く、陥凹を21病変に認めた。分布は盲腸を除き全大腸に見られたがS状結腸，横行結腸に比較的多かった。

2) 腫瘍性病変40病変を表面型腫瘍（27病変），LST（13病変）の2病型に分類し，非腫瘍性病変である過形成性ポリープ（5病変）を独立して扱い計3つの病型に分けた。定義として表面型腫瘍は比較的小さい病変で側方発育傾向の明らかでないものとし，LSTは大きさ1cm以上で側方発育を主体とするものとし，結節集簇の明らかなgranular type（8病変）と，結節集簇の明らかでないnon-granular type（5病変）に亜分類した。

3) 過形成性ポリープは1cm程度で表面の顆粒状変化が目立ち陥凹に乏しい傾向はあるが特異的ではなく，確定診断には組織所見が必要な場合が多い。

4) 表面型腫瘍は類円形の透亮像として描出されるものが多く，ほとんどが2cm以下で5mm程度の小病変も多くみられた。約半数に陥凹を伴っており，病変の辺縁，表面，陥凹形状とも多彩な所見を呈した。腺腫とm癌の鑑別は困難であった。一方sm癌になると壁集中，壁変形が高率に出現し，それらの所見は深達度指標として有用であった。

5) LSTは2cmを超えるものが多く，わずかにバリウムをはじく分葉状の平坦隆起として描出された。granular typeは結節集簇が目立ち，明らかな陥凹形成に乏しく，non-granular typeは結節集簇が目立たず，星芒状の陥

凹を有するものが多かった。癌と腺腫の鑑別は困難であった。LSTでは襞集中、壁変形の所見は腺腫においても認められsm癌に特異的な所見とは言えなかった。側面像での毛羽立ちはLSTに特徴的であった。

以上により注腸X線検査にて表面型大腸病変の発見、描出、病型分類が可能であること、表面型腫瘍にはsm癌がかなり多く含まれており襞集中、壁変形の所見にて鑑別できることを明らかにした。

### 論文審査の結果の要旨

申請者 曾根康博は、注腸X線検査による大腸平坦隆起病変の診断精度を検討し、併せて診断基準の設定を試みた。通常注腸検査4,665例から42例、45病変が発見された（発見率0.9%）。組織学的には腺腫が最も多く24病変、次いでsm癌12病変、m癌4病変、過形成性ポリープ5病変であった。5mm以下の病変は5病変（11.1%）であった。過形成性ポリープ、腺腫、m癌には特異的X線所見が得られず、鑑別診断には生検による組織診断が必要である。sm癌では襞集中、壁変形がそれぞれ70%に認められ、また、LST（側方進展型腺腫）では側面像で毛羽立ち像が55.6%にみられ、注腸所見として特異性が認められた。

この研究成果は注腸X線診断に新知見を加えるものであり、放射線診断学の進歩に少なからず寄与するものと認める。

---

#### [主論文公表誌]

表面型大腸病変の注腸X線所見

平成7年1月発行 岐阜大医紀 43(1) : 9~21